



ブック

苦野氏は、学校教育に対して次の方向を示す。
①「学びをもつと遊び(探究)」に。「言われたことを言われた通りに、自分なりの問いを立て、自分なりの答えを見つけ出す」へ。②「学びの個人化と協同化を」。

「みんな一緒に」をやめ、時間割もテストも、一人一人別々に。同時に、人に力を貸す、借りるという学びの「協同化、プロジェクト化」を進める。
氏は、教育の目的とは、「自由の相互承認」の態度を育むことを土台に、「自由」になるための力を育むことだという。いい会社に入れば幸せになれるという「神話」が崩れた現在、個人は「自分はどう生きれば幸せなのか」という問いを立て、答えを見つけていく必要がある。その「探求型の学び」を妨げるのが、学校や親の「とりあえず、あれも

「学校」をつくり直す
苦野一徳

「学校」をつくり直す

苦野一徳 著

907円 河出新書

☎03-3404-1201

これも勉強しておきなさい」という圧力だという。学校教育の目的は基礎・基本を教えることだという考え方にも異議を唱える。スタンダードやエビデンスについては、「なぜ」という哲学不在のまま教育政策として横行させないよう警鐘を鳴らす。「そもそもこれは何のため?」

という対話を、先生同士だけでなく、子どもたちと一緒に、学校を共に作り合う経験を通して、未来の市民社会の担い手として個人の自由を相互承認する社会を作るための学びこそ重要だという。

評者は考える。

今後、教職に就く若者が、「言われたことを言われた通りに」という受け身の姿勢から、「自分はどう生きたいのか」という姿勢に転換し、目的意識に基づいて主体的に教職を追及できるようにすることこそ、スタンダードやエビデンスの前提として必要なのだろう。
(前聖徳大学教授・西村美東士)